

日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER



NO. 145
2016/11/25

目 次

第 11 回 AFMA (アジア中東学会連合) ウランバートル大会	1
日本中東学会第 33 回年次大会の開催と研究発表募集	8
AJAMES 編集委員会報告	10
寄贈図書	11
会員の異動	12
事務局より	12
編集後記	13

第 11 回 AFMA (アジア中東学会連合) ウランバートル大会

World New Trends in the 21st Century and Middle East

日本中東学会は、韓国中東学会、中国中東学会、モンゴル中東学会とともにアジア中東学会連合 (AFMA) を構成しています。AFMA は 2 年に 1 度大会を開催し、各加盟学会が輪番で主催を担当しています。2012 年には北京、2012 年はプサン、2014 年は京都で大会が開かれました。そして今年 は 9 月 23 日・24 日にモンゴル国ウランバートルにおいて開催されました。テーマは、“World New Trends in the 21st Century and Middle East” でした。

日本中東学会では、研究成果の国際発信を推進する観点から、旅費等の補助金 7 万円を支給する募集をおこない、5 名の会員の申請が採択されました。同時に、自費にてご参加くださった会員 5 名、学会を代表して東長靖会長と森山央朗事務局長、合わせて 12 名の会員が参加しました。参加者と報告題目は次のとおりです。(以下、敬称略)

【補助金採択者】

田中友紀 (九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程)

Tribalism and Localism in Libya: A Study of Ruling Actors from the Kingdom to the Qadhdhāfi Regime
山本直輝 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)

Ibrāhīm al-Kūrānī on Walī and Ecstatic Utterance (Shāḥ): Explaining “Orthodox” Ṭaṣawwuf to Javanese Disciples

竹村和朗 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー)

The Future of the Ownership of Desert Land: A Reflection Based on Modern Egyptian Experiences
大坪玲子 (東京大学大学院総合文化研究科学術研究員)

Tribalism and Qāt in Yemen

柳谷あゆみ (公益財団法人東洋文庫研究員)

Gaining “Legitimacy” in 12th Century Islamic World: Saladin against the Zangids

【一般参加会員】

村上拓哉 (公益財団法人中東調査会研究員)

Alliance for Monarchy: The Role of the Gulf Cooperation Council for the Regime Security
李眞恵 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士後期課程)

Nation building in multi-ethnic Kazakhstan: Focusing on the Status of Kazakh of Kazakh Diaspora (Oralman) Policy

池田昭光 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー)

Flexibility and Tension: A Case Study of Communicational Practice in a Lebanese Town
鈴木啓之 (日本学術振興会特別研究員)

Japanese Government and the Palestinians: How the Relationship Started

鳥山純子 (日本学術振興会特別研究員)

Shopping schools in Egypt: The politics behind the prosperity of private international schools

【学会代表】

東長 靖 (日本中東学会会長／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)

Towards the Asian Network of Sufi Studies: From the Japanese Experience

森山央朗 (日本中東学会事務局長／同志社大学神学部准教授)

(江川ひかり 国際交流担当理事)

全体報告

2016年9月23日・24日にウランバートルで開催された第11回AFMA大会の学術プログラムは、第1日（23日）のAFMA理事会と第2日（24日）の研究発表によって構成されていました。ここでは、AFMA理事会と研究発表全体の概略を紹介することとします。

【AFMA理事会】

この理事会は、AFMAを構成する各国（日本、韓国、中国、モンゴル）の中東学会の代表が各国の中東研究の現状と課題やAFMAの運営方針などについて議論するために、2年ごとの大会にあわせて開催されてきました。今回の理事会は、大会初日（23日）の16時から18時にかけて、レセプション会場となったイフク・テンゲル宮殿（ウランバートル郊外の大統領の夏の離宮）の一室で、レセプションに先立って開かれました。出席者は、幹事学会であるモンゴル中東学会からニヤムザグド・スフラグチャー会長とオユンスレン・サムダンダシュ事務局長、ルハグヴァスレン・ブレヴ会員が、中国中東学会からは楊光会長（ご本人は「楊」の字に簡体字を使用）が、韓国中東学会からはキム・スワン事務局長が、そして、本学会からは東長靖会長と森山央朗事務局長が参加しました。

まず議題となったのは、各国の中東学会の現状と課題についてでした。本学会については、会員数約700名とAFMA加盟学会の中で最大の規模を持ち、それらの会員が、歴史学や古典思想研究から現代政治まで人文・社会系の様々な分野で研究を行っていることが、他の参加学会に比べての特徴であることが改めて浮き彫りになりました。

それが特徴になるということは、他の加盟学会の会員の方々が特定の分野に集中しているということですが、実際に、韓国中東学会と中国中東学会の会員は、政治学・国際関係学に集中していることのことでした。会員数については、韓国中東学会は約270名とのことでした。他方、中国中東学会の楊会長は、ご自身の学会の会員数をあげませんでした。中国全体で中東研究は急速に発展していて、アラビア語などの授業を提供する大学も4校から40校に急増しているそうです。韓国においても同様の状況があり、5大学15学科で中東に関する講座が開設されていて、国内外の大学・研究機関相互の協力も盛んに行われているとのこと。韓国中東学会のキム事務局長は、そうした韓国の現状を紹介した上で、会員が集中している政治学・国際関係学での研究を発展させつつ、思想研究や歴史学、文学、芸術などへも研究分野の多様性を広げていくことが大きな課題であると述べていました。

モンゴル中東学会の現状については、モンゴル国の総人口が約306万人ということから言って、会員数などを他の3カ国と同列に論じることはできません。それでも、モンゴル国立大学でアラビア語の授業などが開講されており、中東関係で修士論文を書く院生も増えているそうです。研究分野としては、やはり、政治学・国際関係学に集中しているとのことでした。

次に、加盟学会の増加の可能性について議論されました。韓国中東学会は、オーストラリア中東学会と交流があり、それに基づいて、オーストラリア中東学会の加盟を検討することを提起しました。一方、中国中東学会は、シンガポール中東学会の加盟の検討を提起し、あわせて、アラブ諸国の学会の加盟を検討すること提案しました。そして、モンゴル中東学会は、同学会と交流の深いロシア中東学会の加盟の検討を提起しました。

加盟学会の増加については、前回のウランバートル開催の第8回大会の際にも発議されており（『ニューズレター』第115号を参照）、10年あまりの間、繰り返し触れられてきたようです。その

たびに、各参加学会がそれぞれに交流のある未加盟学会の加入を推すといったことを繰り返してきたのか、具体的にはなかなか進展してきませんでした。今回も、韓国、中国、モンゴル、それぞれの提案を持ち帰って検討し、引き続き協議していくことになりまして、AFMAとして一致して特定の学会に加盟を呼びかけていくというような具体的な行動には結びつきませんでした。とりあえず、次回のAFMA大会に、オーストラリア、シンガポール、ロシアの各中東学会を招待することを検討するとのことでした。ちなみに、日本中東学会としては、特定の国の中東学会の加盟を推すことはありませんでした。歴史学を専攻する筆者個人としては、東洋学の長い伝統を誇るロシアの研究者が参加してくれると面白いのではと思いました。

最後の議題として、2014年からAFMAの会長を務めてきたモンゴル中東学会のニャムザグド会長が退任することと、後任に中国中東学会の楊会長が就任することが承認されました。これに伴い、2018年に予定されている次回(第12回)AFMA大会は、中国中東学会を幹事学会として北京で開催されることと決定されました。また、次回大会に関連して、本学会の東長会長から、若手研究者育成支援の一環として、若手研究者を集めたセッションを組み、アジアにおける次世代の中東研究者の間の議論を活性化することが提案されました。なお、ニャムザグド氏は、長きにわたって務めてきたモンゴル中東学会の会長からも勇退し、後任にはルハグヴァスレン氏が着任するとのことでした。

【研究発表】

大会2日目(24日)に行われた研究発表は、我々の宿舎でもあった、ウランバートル中心部のウランバートル・ホテルを会場として、8時30分から開催されました。開会にあたって、モンゴル中東学会のニャムザグド会長の挨拶に続き、モンゴル国立大学国際関係学・公共政策学部のバットウルガ・スヘー学部長と、ムラト・カラギョズ大使(トルコ共和国ウランバートル駐箚大使)が来賓として祝辞を述べ、加盟学会の各代表(日本:東長会長、韓国:キム事務局長、中国:楊会長)がそれぞれ挨拶をしました。

研究発表は、これらの儀礼の後に、2つのセッションが並行して開かれる形式で行われ、午前中(10時30分~12時30分)は、「社会問題」をテーマとするセッションと「国際関係・安全保障問題」をテーマとするセッションが開かれました。午後の第1部(14時~15時30分)には、「歴史と文化」をテーマとするセッションと「経済」をテーマとするセッションが開かれ、第2部(16時~17時30分)には、「国際関係と人権」をテーマとするセッションと、再び「社会問題」をテーマとするセッションが開かれました。これらの6つのセッションに、合計32の研究発表が配置されていました。

その32の研究発表の学会別の内訳は、本学会から11本、モンゴル中東学会から10本、韓国中東学会から7本、中国中東学会から3本、オーストラリア(個人参加?)から1本でした。ということで、本学会の会員による研究発表が、最も大きな割合を占めることになりました。先述のとおり、本学会は他のAFMA加盟学会と比べて会員数が多いこともあり、また、ウランバートルという開催地が多く会員にとって魅力的に映ったこともあったようです。もちろん、この記事の冒頭で述べたように、研究発表を希望するものの参加経費の支出に困難がある会員に対して、学会から補助金を支給できたことも、多くの会員の参加につながったと思います。今回のAFMA大会の研究発表において大きなプレゼンスを示せたことは、会員の研究成果の国際発信強化の観点からひとつの成果と言えるでしょう。

本学会から参加した会員各位が、具体的にどのようにプレゼンスを示したかについては、後段の「大会参加記」に譲るとして、ここでは全体的な傾向を述べておきます。プログラムを見返して最

も目につく傾向は、現代の政治や経済、国際関係に関する報告が圧倒的に多いことです。前近代の歴史や思想研究などの人文諸学の分野での発表は、32本中わずかに4本で、そのうちの3本までが本学会の会員（東長会長、柳谷あゆみ会員、山本直樹会員）によるものでした。残りの1本は、韓国中東学会から参加したセオン・ミンホン氏による“Commercial Activity between Korea and Southern Arabia in the Medieval Ages”でした。こうした研究発表の大きな傾向にも、AFMA 理事会での議論から浮かび上がった、アジアにおける中東研究の全体的な傾向と、その中での日本の中東研究の特徴が反映されていることが分かります。

その他に気付いた点としては、モンゴル、中国、韓国からの参加者による研究発表には、いずれも、中東地域と自国の関係について、エネルギー安全保障や市場開拓・投資といった観点から分析したものが含まれていたのに対して、本学会の会員による発表には、中東と日本の関係を扱ったものが含まれていなかったことです。確かに、本学会の会員の中でも、より広く日本の中東研究全体の中でも、日本と中東地域の関係についての専門的で継続的な研究は少ないと言えます。このことを、20世紀後半の日本の中東研究が「石油だけではない多様な中東理解」を標榜してきたひとつの結果と解釈すべきなのか、それとも、日本と中東地域の関係についての知見は、研究者によってではなく、商社員や外交官などの実務家によって蓄積されてきたためと考えるべきなのか、今ひとつ判然としません。いずれにしても、他の AFMA 加盟学会から見れば、本学会からの参加者の中に、エネルギー面で大きく依存している中東地域との関係に関する研究発表を行う者が全くいなかったことは、あるいは奇妙に映ったかもしれません。

最後に、ホスト役を務めたモンゴル中東学会からの研究発表についてですが、2名の研究者による共同研究の発表が多かったことが印象的でした。モンゴル中東学会からの10本の発表のうちの5本が、2名の研究者による共同研究としてプログラムにあがっていました。したがって、発表の本数は10本でしたが、発表者の数は15名と、最も多くがエントリーしていたことになります。このことは、自国での開催ということで当然とも言えますが、AFMA 加盟学会の中では最も若い学会として、様々な工夫を凝らして自国の中東研究の発展に努めていることの表れともとれます。モンゴルの発表者には、20代後半から30代前半とおぼしき若い方々が多く、彼ら彼女らが協力して、モンゴルにおける中東研究の発展を担っていくことが期待されているように見受けられました。

翻って本学会を見ると、AFMA 大会に限らず通常の年次大会でも、共同研究の発表はあまり多くありません。それは、地道な個人研究の蓄積が人文・社会系の研究の手堅い基礎であることから、決して悪いことではありません。とはいえ、今回の AFMA 大会において、本学会だけが中東地域と自国の関係を全く取り上げなかったことと考え合わせると、日本－中東関係（特に貿易や安全保障面における）という、国内的にも国際的にも実は一定の需要があるのではないかとと思われるトピックについて、学会として共同研究を組織しておいて、必要に応じて会員がその成果を発表などに利用できるようにしておく、本学会の社会的有用性などを示す上で、結構有益かつ効率的なようにも思えてきました。といった浅薄な思いつきにたどり着いたあたりで、既に最低気温が氷点下を下回り、薄雪の降り出していた9月下旬の秋のウランバートルで開催された、第11回 AFMA 大会全体の報告を終えることとします。

なお、モンゴル中東学会は、今回の AFMA 大会における研究発表のペーパー集を発行する予定とのことです。それが発行されましたら、学会事務局からお知らせできると思いますので、日本、韓国、中国、モンゴル、それぞれの中東学会会員による研究発表の詳細はそちらをご覧ください。

（森山央朗 事務局長）

大会参加記

AFMA モンゴル大会に参加して

田中 友紀

2016年9月23日から2日間、私はAFMA モンゴル大会に参加した。福岡空港から韓国経由で首都ウランバートル入りしたが、残暑厳しい日本から一転、同地はもうすでに初冬を迎えていた。

到着翌日の23日、昼間は他の参加者と共にウランバートル中心部を見学した。街の中心に位置するチンギスハーン広場に、社会主義革命の英雄スフバートル像と、民主化以降の国家統合の象徴であるチンギスハーン像が並存していたことが印象的であった。夕刻になると、我々一行はウランバートル郊外の夏宮殿で行なわれるレセプションに招待された。そこで初めて翌日のプログラムが渡され、午前中の私の発表は午後に変更されていた。私は少し動揺した。

翌朝、宿泊先のウランバートルホテルで学会が始まった。オユンスレン・モンゴル中東学会会長を筆頭に、各中東学会会長からのご挨拶、そして在モンゴルのトルコ、UAE 両大使からもご挨拶があった。中でも、東長靖会長はモンゴル語でスピーチをご披露され、モンゴル人参加者から拍手喝采を浴びておられた。モンゴル人参加者が「東長先生はモンゴル語がご専門ですか？」と私に聞いてくる位の流暢さであった。

セレモニーに続いて個人発表が行なわれ、私は午後から「リビアにおける部族主義と地域性」というタイトルで発表をさせていただいた。1969年のカッザーフィーの軍事クーデタを前後とする政権移行期に焦点をあて、カッザーフィーがどのようにして政権運営を軌道に乗せることができたのかを、その支配エリート構成に着目することによって説明した。事前に何も知らされなかったのとおり、とりあえず30分で発表を用意してきたが、発表前日に各自の持ち時間は20分、そして司会者から発表開始の10秒前にキッチリ15分で終わるようにとお願いされた。とにかく、発表後半が駆け足になってしまったことが悔やまれる。

最後になってしまったが、日本中東学会から学会参加の機会をいただいたことに対して改めてお礼を申し上げたい。中でも東長会長、森山央朗事務局長、江川ひかり国際交流理事には本当にお世話になった。重ねて感謝申し上げたい。今後もアジアの中東学会の交流や連帯が深まり、将来に向けてますます発展していくことを願ってやまない。

【追伸】ウランバートルの大気汚染は世界最悪レベルです。次回参加される方は、どうぞお気をつけて。

AFMA 大会に参加して

山本 直輝

筆者は今回ウランバートルでの第11回AFMA（アジア中東学会連合）大会に参加する機会をいただいた。大会ではモンゴルや中国、韓国、日本から参加した研究者の方々による中東研究の最前線を追う刺激的な発表を拝聴し、また自身の研究内容に対する貴重なフィードバックを得ることができた。

またAFMA大会に参加できたことで得られた知見として非常に興味深かったのは、モンゴルとトルコの関係である。AFMA大会に参加していたモンゴル国立大学の学生にはトルコの大学にトルコ政府の支援で留学した経験を持つ方が何人おり、トルコ語で歓談する機会を得ることができた。学生らはモンゴル人であるが、留学中は「テュルク人」として歓待され楽しく過ごすことができたようだ。また今回の学会で知り合ったモンゴル人の先生に大会後ウランバートル郊外のカザフ

系モスクに連れて行っていただいた。そのモスクは近年トルコの篤志家の支援によって建てられ、他のカザフ系モスクにはトルコのエルドアン大統領が訪問したこともあるそうだ。カザフ系モスクではトルコのナクシュバンディー教団エレンキョイ支教団の導師であるオスマン・ヌーリー・トプバシの著作のカザフ語訳、モンゴル語訳が何冊も置かれており、トルコ系イスラーム知識人がモンゴルのムスリム社会でも一定の評価を得ているとの印象を持った。またトルコ国際協力調整庁(TİKA)がモンゴルでの博物館の建設や考古発掘に援助を行っており、トルコは「テュルク」人と「イスラームの同胞」双方に積極的にアプローチをはかっているように見受けられた。今回の AFMA 大会では中東研究の第一線で活躍する研究者による発表を聞く機会を得られたことのみならず、ウランバートルで開催された大会に参加することによって、モンゴルと中東世界とのつながりを生の体験を通して学ぶことができ、これからの筆者の研究にとって極めて有意義な時間であった。

第 11 回 AFMA 国際会議に参加して

竹村 和朗

この度、私は日本中東学会からの補助金をいただき、モンゴル・ウランバートルで開催された第 11 回 AFMA 国際大会に参加した。まずは関係の皆様へ御礼申し上げます。

今回の AFMA 参加は、私にとって多くの発見があった。わずか数日の経験ではあったが、大変実りのある時間になった。私は「食わず嫌い」でこれまで AFMA に参加したことがなく、参加を考えたこともなかったが、実際に参加してみると、多くの収穫があった。それは、国際発表に関する気づき、アジアの中東研究の幅広さ、同じ分野の研究者との交流などさまざまであるが、以下では国際発表について考えたことを述べておきたい。

私は研究発表として、これまで進めてきたエジプトの沙漠開発に関わる題材から、本会議の主題に掲げられた「21 世紀の世界的新潮流と中東」に絡めて、「沙漠の土地所有権の未来」と題するものを用意していた。その発表を終えると、セッションの司会を務めていた中国中東学会の Yang Guang 先生から「その所有権は実際に社会にどのような効果があったのか」との質問をいただいた。私が所有権概念の生成と展開のみに話を絞っていたのに対し、Yang 先生はより実際的な社会経済的関心から話を聞き、質問をされたようであった。互いの専門分野の違いもあり、私がうまく返答できず、苦し紛れに「また別の機会に」と言ったところ、中国中東学会の会長でもある Yang 先生は「では、2 年後の中国の AFMA でよろしく！」と明るく笑いを込めてまとめてくださり、救われた思いであった。

AFMA には多様な学問的背景を持つ研究者が集まり、使用される英語もおそらく参加者の大半にとって普段用いている言語ではないため、自分が述べたいことをいつも以上に明確にし、研究や思考の文脈を共有していない聞き手にも理解してもらえるような工夫をする必要があることを強く感じた。この点では、同じく日本から参加した京都大学大学院の山本直輝さんの発表は大変よく練られており、17 世紀のさほど有名でないイスラーム思想家を扱いながら、その現代的意義や AFMA のテーマとの関連を手際よく論じてみせ、学ぶところが多かった。

初めて訪れた「異国」モンゴルでの国際発表を通じて、日常的な文脈や思考から距離をとることができたことも自らの研究を客観的に見直す助けとなったように思う。わずか数日の滞在であったにもかかわらず、帰国後の腹回りの劇的な変化と体から立ち上る肉の臭いがなかなか消えないことには驚かされたが。

所感

大坪 玲子

国際学会など自分とは無縁だと思っていたのだが、今回は JAMSE の助成を得て参加することができた。Tribalism and Qāt in Yemen と題しておこなった自分の発表はまだ未熟で、反省ばかりであったが、国際学会の雰囲気を知ることができたのは良い体験になった。

モンゴルでは各国の発表者と交流する機会もあり、個人的にはイェメン研究者に会えたことが大きな収穫となった。プログラムの関係で残念ながらお互いの発表を聞くことはできなかったが、今後も連絡を取り合っていきたいと思っている。

日本からの参加者が多く、彼らとの交流もまた楽しかった。みな中東諸国に長期滞在した経験を持つ強者ばかりでトラブルにも柔軟に対応し、適度に団体行動を楽しみ、適度に個人行動を認め、修学旅行のようだった。市内観光には参加できたが、学会翌日の市外観光にはフライトの関係で参加できなかったのが、非常に残念である。

今回の主催国の MAMES のスタッフやお手伝いとして参加した学生の方々には最初から最後までいろいろとお世話になった。感謝申し上げます。ウランバートルに到着するフライトがちょうど日没あたり、大空から雄大な夕陽を見ることができた。またモンゴルを訪問したいと思う。

AFMA 大会に参加して

柳谷 あゆみ

AFMA 第 11 回大会のタイトルは “World New Trends in the 21st Century and Middle East” で、正直なところ自分の専門である中世イスラーム史とはかけ離れている気はしたが、国際学会に参加したいという希望と、モンゴルに行ってみたいという不純な動機もあり、今回参加申請をした。先に結論から言えば、個人的には得るところがとても大きかった。参加して本当に良かったと思う。

私は “Gaining “Legitimacy” in 12th century Islamic World : Saladin against the Zangids” という題目で、12 世紀末にアイユーブ朝創設者サラフ・アッディーンが、ザンギー朝に対抗する際、自身の行動の正当性を説明すべくアッバース朝カリフに発出した書簡の内容の考察・分析を行った。題目に明記したとおり 12 世紀の話題なのでこれを論じて大丈夫なのかという不安は当然あった。

だが、当日、実際に報告して実感したのは、題目やテーマの問題ではなく、専門的な内容をどれだけ適切に報告できるかをもっと考えるべきだったということである。モンゴル、日本、韓国、中国の四か国の中東学会からなる AFMA 大会の研究発表は、近現代を対象とした研究が多いという傾向はあるにしても、ジャンルは政治・経済・文化・歴史・思想と多岐にわたっている。私が報告を行ったのは「歴史と文化」セッションで、その名の通り幅広い話題が扱われた。聴衆と報告者の専門・関心が完全に一致しているほうが珍しいだろう。自分の専門分野とは異なる内容で、また専門性が高くても、報告者が十分に内容を絞り込んで、明快に論じている報告はわかりやすく面白い。私が加わったセッションは報告時間が 15 分というタイトなものであったが、「限られた時間内に、母語以外で、専門的な内容をわかりやすく」というのは仮にテーマが限定されていたとしても国際学会では絶えず考えなければならないことである。内容のレベルを下げることなくきちんと伝えることは、工夫次第で両立する。その大切さとテクニックを本大会では学ぶことができた。中世を専攻する研究者が参加他国では少数だという状況を本大会の参加者からも聞いたが、日本の研究者の多様性は評価されており、前近代を研究対象とする研究者も参加する意義はあると思う。

モンゴル中東学会の皆様や大会運営を支えた学生さんたちのすばらしい心配りを受け、初モンゴル訪問も充実したものになった。顔だちなど似ているところが多いだけに、塩味のミルクティーなど少しの違いが衝撃的で楽しかった。参加に際してお世話になった皆様に心から感謝を申し上げたい。

日本中東学会第 33 回年次大会の開催と研究発表募集

2017 年度の日本中東学会大会第 33 回年次大会は、九州大学が担当いたします。日程は 5 月 13 日（土）14 日（日）で、両日ともに、九州大学箱崎キャンパスで開催いたします。

実行委員会は、九州大学人文科学研究院を中心に、同校の教員、関係者、また鹿児島大学の会員にもご協力いただいて構成されています。土曜日の公開講演などについても鋭意企画中で、博多の歴史にちなんだものを考えております。また九州大学箱崎キャンパスは、2018 年夏に伊都キャンパスに移転予定です。会員の皆様の多くにとっては、箱崎を訪れる最後の機会となることと思えます。ぜひ多数のご参加をお待ちしております。（清水和裕 大会実行委員長）

2017 年度の年次大会は九州大学（福岡市東区箱崎 6-19-1）で開催されることになりました。例年どおり、大会の 1 日目が公開企画と総会、2 日目が研究発表になります。どうぞよろしく御参集くださいますようお願い申し上げます。

開催日時：2017 年 5 月 13 日（土）・14 日（日）

開催場所：九州大学箱崎キャンパス文系地区共通講義棟

会場の所在地とアクセスは、以下の URL よりご確認ください。

<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/campus/hakozaki>

【実行委員会】

委員長：清水和裕（九州大学）

事務局長：小笠原弘幸（九州大学）

委員：石黒大岳（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、鶴戸聡（鹿児島大学）、沖祐太郎（九州大学）、木下博子（九州大学）、久保智之（九州大学）、馬場多聞（九州大学）、森田豊子（鹿児島大学）、山尾大（九州大学）

【個人研究発表・企画セッション】

研究発表の応募要項は以下のとおりです。研究発表をお考えの方は、どうぞふるってご応募ください。応募の締め切りは、12 月 25 日（日）とさせていただきます。

1. 研究発表

研究発表を希望される方は、12 月 25 日（日）までに年次大会実行委員会までメールにてご応募ください。メールアドレスは、james2017.kyushu@gmail.com です。

その際、下記の諸点についてお知らせください。

①氏名：漢字もしくはカタカナ表記

②氏名のローマ字表記

③所属：大学院生の場合はその旨を明記

④連絡先メールアドレス

⑤発表タイトル（仮題も可）

⑥発表内容の概要：日本語 400 字程度／英語 200words 程度。日本語か英語のいずれかで結構です。テーマと内容が明快にわかるように記してください。正式の「要旨」につきましては、実行委員会での採否の決定後、改めて発表予定者に執筆をお願いすることになります。発表の言語は、原則として、日本語か英語のいずれかとします。それ以外の言語での発表をご希望の場合は、実行委員会事務局までご相談ください。

⑦プロジェクター使用希望の有無:なお、プロジェクター以外の映像機器（OHP、現物投影機等）の使用をご希望の場合は、実行委員会事務局までその旨ご連絡ください。可能な限りご希望にそえるように致しますが、用意できない場合もありますことを予めご了解ください。また、プロジェクターに接続する PC については、発表者各自でノートパソコン等をご持参ください。必要に応じて RGB ケーブル接続用のアダプターもご自身でご用意下さい。実行委員会として、会場でのネットへのアクセス環境を準備することはできかねます。

※応募された方には、年次大会実行委員会から 1 週間以内に受信確認のメールを差し上げます。受信確認メールが届かない場合は、実行委員会事務局長・小笠原の次のメールアドレス宛に必ずご一報ください。ogasawar[at]lit.kyushu-u.ac.jp

2. 企画セッション

第 33 回年次大会では、会員による企画セッションも募集します。特定のテーマに関する企画セッションの開催をご希望の方は、以下の要領でご応募ください。応募締め切りは、研究発表と同じく 12 月 25 日（日）です。

1 つの企画セッションの持ち時間は、発表・コメント・質疑応答を含め 1 時間 30 分とし、発表者は 3 名程度とします。コメンテーター（討論者）をつけるかどうかは自由ですが、必ず 1 名の司会者が必要です。企画責任者・発表者・司会者はすべて日本中東学会会員であることとします。また、企画責任者は、発表者・司会者・コメンテーターのいずれかを必ず兼ねることとします。企画責任者が、発表者と司会者、あるいは、司会者とコメンテーターの二役を兼ねることもできます。なお、コメンテーターは非会員でも構いません。

企画責任者は、12 月 25 日（日）までに年次大会実行委員会までメールにてご応募ください。メールアドレスは、james2017.kyushu@gmail.com です。

その際、下記の諸点についてお知らせください。

- ①企画責任者氏名：漢字もしくはカナカナ表記とローマ字表記の双方
- ②企画責任者の所属
- ③企画責任者の連絡先メールアドレス
- ④使用言語：原則として、日本語か英語のいずれか。それ以外の言語をご希望の場合は、実行委員会事務局までご相談ください。
- ⑤企画セッションのタイトル
- ⑥企画セッションの主旨：日本語 400 字程度／英語 200words 程度。日本語か英語いずれかで結構です。
- ⑦参加者一覧:各参加者氏名の漢字もしくはカタカナ表記とローマ字表記の双方、所属、セッションでの役割。司会とコメンテーターは応募時点では未確定でも構いません。
- ⑧各発表者の発表要旨：⑥の企画セッションの主旨と同様の分量・要領
- ⑨プロジェクター使用希望の有無:なお、プロジェクター以外の映像機器（OHP、現物投影機等）の使用をご希望の場合は、実行委員会事務局までその旨ご連絡ください。可能な限りご希望にそえるように致しますが、用意できない場合もありますことを予めご了解ください。また、プロジェクターに接続する PC については、発表者各自でノートパソコン等をご持参ください。必要に応じて RGB ケーブル接続用のアダプターもご自身でご用意下さい。実行委員会として、会場でのネットへのアクセス環境を準備することはできかねます。調整の都合上、企画内容等について、実行委員会から問い合わせや御相談をさせていただく場合があります。

※応募された方には、年次大会実行委員会から1週間以内に受信確認のメールを差し上げます。受信確認メールが届かない場合は、実行委員会事務局長・小笠原の次のメールアドレス宛に必ずご一報ください。ogasawar[at]lit.kyushu-u.ac.jp

3. 託児所

託児所の利用をご希望の方は、実行委員会事務局までお申し出ください。申し込みの締め切りにつきましては、メーリングリストなどで追って通知いたします。

4. 宿泊について

福岡市の宿は常時混み合っております。年次大会に参加される予定の方は、十分な余裕をもって早めに宿を手配されることをお勧めいたします。

連絡先：

日本中東学会第33回年次大会実行委員会事務局

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1 九州大学人文科学研究院 小笠原弘幸研究室

Tel：092-642-2385（小笠原研究室直通）

Fax：092 - 642 - 2384（研究室事務室共用）

E-mail：james2017.kyushu@gmail.com

※可能な限りメールにてご連絡くださいますようお願い申し上げます。

（小笠原弘幸 大会実行委員会事務局長）

『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告

1. 32-2号 現在編集中

32-2号では、論文3本（うち特集論文3本）、研究ノート2本、博士論文要旨1本が採用されました。現在、来年1月の刊行を目指して編集作業を鋭意進めております。

2. 33-1号 投稿募集中

33-1号の締切は12月1日です。論文、研究ノート、書評等さまざまなジャンルでの投稿をお待ちしております。とくに欧文での投稿を推奨、歓迎しております。また、英文による特集の企画がありましたら、ぜひご投稿ください。

3. 博士論文要旨

AJAMESでは、会員による中東関連の博士論文要旨（英文）を掲載しています。とくに締切を設けておりませんので、最近博士論文を提出された会員の方は、随時ご投稿ください。また、お近くに中東関連で博士論文を提出された方がいらっしゃれば、ぜひ投稿を呼びかけてください。

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部史学科 粕谷元気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@james1985.org

（粕谷元 AJAMES 編集委員長）

寄贈図書

【単行本】

- 松尾昌樹、岡野内正、吉川卓郎編者『中東の新たな秩序』ミネルヴァ書房、2016年。
川本智史『オスマン朝宮殿の建築史』東京大学出版会、2016年。
スコット・L・モンゴメリ『翻訳のダイナミズム：時代と文化を貫く知の運動』大久保友博訳、白水社、
2016年。
鷹木恵子『チュニジア革命と民主化：人類学的プロセス・ドキュメンテーションの試み』
明石書店、2016年。
サーミー・ムバイヤド『イスラーム国の黒旗のもとに：新たなるジハード主義の展開と深層』
高尾賢一郎、福永浩一訳、青土社、2016年。
橋爪烈『ブワイフ朝の政権構造：イスラーム王朝の支配の正当性と権力基盤』慶應義塾大学出
版会、2016年。

【逐次刊行物・ジャーナル等】

- 『アラブ・イスラム研究』第14号（2016年）。
『要覧2016』大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館、2016年。
(森山央朗 事務局長)

会員の異動

(2016年7月以降)

【新入会員】

- 李 眞恵

相樂 悠太

千坂 知世
桐原 翠

坂元 春香

【復会会員】

- 長谷部 圭彦

【所属先・連絡先の訂正・変更】

- 村上 拓哉
縄田 浩志

清水 雅子

藤元 優子
相島 葉月

多田 守
高橋 信一郎

栗倉 宏子
宮治 一雄
宮治 三絵子
中島 悠介
西野 正巳

【連絡先不明の会員】

以下の会員の方々につきましては、事務局から郵便、メール、電話などでの連絡がつかなくなっております。至急事務局にご連絡ください。また、他の会員の皆様の中で、以下の方々と連絡をお取りになっている方がおられましたら、事務局に連絡するようにご本人に呼びかけてください。

相川 洋介 井上 貴智 大橋 一寛 遠藤 春香 苅屋 紀子
川畑 亜瑠真 志村 文子 蔣 旭棟 子島 進 武田 歩
速水 美緒 星 光孝 松浦 由佳子 森田 昌宏 若松 大樹
ディミタル・ミハイロフ・デイミトロフ レヴェント・シナン

Mohammad Qasim Wafayazada Victor Manuel Barraso Shahzadah Nayyar Jehan

(森山央朗 事務局長)

事務局より

先日11月20日(日曜日)に、岐阜県多治見市のバロー文化ホール(多治見市文化会館)において、今年度の公開講演会が開催されました。詳しい報告は次号に掲載予定です。今期(第16期)の役員としては、これで今年度の主な企画を大体ひと通りこなし、2015年4月から始まった任期も、2017年3月末まで残すところあと4ヶ月ほどとなりました。

ということで、事務局長の任期の終わりもめでたく見えてきたと言いたいのですが、最後の大仕事として役員選挙が迫っております。役員選挙は正会員によって行われ、本会は会費の前納制をとっておりますので、来年度(2017年度)までの会費を納入済みの正会員が、評議員(60名以内)の選挙権と被選挙権を持っており、選挙権を持つ正会員によって選出された評議員が、互選によって15名の理事を選ぶという段取りになっています。

これから年末年始の忙しい時期に入りますが、正会員の皆様におかれましては、来年度までの会費の納入を確認のうえ、選挙への積極的な参加をお願い致します。この選挙が終わりますと、現事務局から新事務局への引き継ぎ作業も始められます。もうひと頑張りです。

(森山央朗 事務局長)

編集後記

来年5月、九州大学において開催される次期年次大会の研究発表募集をお届けいたします。大会実行委員会事務局より、11月10日付で学会メーリングリストに配信されたお知らせと同じものです。みなさま、どうかふるって応募くださいますよう、お願い申し上げます。来年の大会は、どのようなラインアップになるか、楽しみです。

と、これを書いているときに、博多駅前の道路大陥没が発生しました。思わず大会は大丈夫かと思ってしまいましたが、あっという間に修復されましたね。すごいです。

次号では、多治見市で開催された公開講演会のご報告とともに、次期大会の暫定プログラムなどをお届けする予定です。少し早いのですが、みなさま、よいお年をお迎えください。では。

(松本弘 ニュースレター担当理事)